

輸 出 検 査 の 話 題 か ら

先頃、わが国からアメリカ合衆国に輸出したゆりにセンチュウの付着が発見され、一時期、日本産のゆりの輸入がストップされるという事件があった。

植物防疫所は、アメリカ検疫当局からの通報に基づき、ゆりの生産地、調整梱包場所、土(充てん用)の採取地などについて原因究明の調査を行ったが、明確な原因は見出せなかった。ただ、土については、それがアメリカ側の要求どおり、地表2フィート以下のところから採土されているものの、その表層土にイネシストセンチュウが発見されたため、採土作業中、風雨等により表土の一部が流入し、それがセンチュウ混入の原因になった

可能性が考えられた。これに対してアメリカ側は理解ある対応を示し、今後充てん材料としては土以外のご屑、風化ひるいし等を使用することで輸出の再開を認めた。こうしてゆり生産農家に不安を与えることなくこの問題は早期に落ち着いた。約3週間での解決であった。

輸出検査は、相手国の要求に基づいて行われているが、輸入検査に比べると比較的地味な存在である。しかし、わが国での検査のあと、輸入国で本番の検査がひかえており、もし問題があれば検査官、証明官を明記して直ちに公式通報が入ってくるだけに、担当の植物防疫官は毎日が勤務評定の連続である。

海 外 の ニ ュ ー ス

わが国未発生の重要病害であるジャガイモがんしゅ病のソビエト連邦内での発生状況について、近着のCanadian Plant Disease Survey に紹介があった。ジャガイモがんしゅ病は、1896年にハンガリーで最初の報告がなされ、2年後西ヨーロッパ、1935年にはソ連に侵入した。現在ソ連邦内での発生は、ロシア連邦、エストニア、ラトビア、リトアニア、白ロシア及びウクライナの各共和国で、ロシア連邦での発生は、274農場、118,472の家庭農園で16,000haと記録されている。

損害は、減収それ自体は少いが、腐敗が早く、13～84%に達し、激しいときは96%の損失をまねいたという。本病の発生は、ポドソル土じょうで降雨が多く、低温で、夏期温度が高い地帯に多い、塊茎の腐敗は砂土>砂じょう土>じょう土の順で土じょうのPHは中性の場合腐敗が多い。10cmの深さの土じょう温度が24～25℃になると本病は発生しない。南部の発生地と無発生地の境の調査では、最もり病しやすい7月の降雨量が75mm、土じょう温度は20℃と記されている。

防除方法としては、汚染ほ場を囲いで囲むこと、汚染ほ場の生産塊茎を廃棄または家畜飼料への転用、その他抵抗性品種の栽培、輪作、有機質肥料の施用が奨励されている。

農薬はDinitro-orthocresol, クロールピクリン Nitrphen等の土じょう施用、カルシウムアナミトを1㎡当り150gか、尿素を同じく1.5kg土じょうにすき込むことを勧めている。抵抗性品種については病徴はなくても汚染があるため、これによるまん延に注意する必要があるようである。

(病菌課 末次哲雄)

訂正 第1号8頁写真説明中「ニセタマナガヤ」は「ニセタマナヤガ」の、10頁表最下段の「チューリップ11オランダ」は「アネモネ11オランダ」のそれぞれ誤りにつき訂正します。
キイチゴ11アメリカ」

発行所 横浜植物防疫所

〒231 横浜市中区北仲通5-57
横浜農林水産合同庁舎
☎ 045(211)2299
編集責任者 井上 亨

印刷所 柏 苑 社

〒232 横浜市南区通町1-6
☎ 045(711)5600